【熊本県文化協会賞】

ばあちゃんと一緒に

熊本県立鹿本商工高等学校　１年　白石　大

ある日、曾祖母について話している家族の声が耳に入ってきました。「財布ばどこになおしたか分らんてったい。それ、この間も同じ事があったとにね。」その会話が曾祖母の認知症の始まりでした。

それまでも認知症について耳にすることはありましたが、こんなに家族が大変だとは思ってもいませんでした。ある日、「一人じゃ介護しきれずに、殺してしまったりするニュースがあるでしょ。介護した人にしか分からん苦労があるけん。分からんでもなかて思うとよ。」と母がぽつりと言いました。母は仕事をしながらの介護だったので、特にきつかっただろうと思います。

日に日に症状が進む曾祖母には介護認定が下りましたが、デイサービスに通うようになってからもなかなか行きたがらなかったりして、朝から説得しなければならない母や祖母の負担は大きいままでした。それでも家族だから自宅で介護しなければ、と頑張っていましたが、ある日ついに曾祖母は台所で足を滑らせ、右大腿骨を折ってしまいました。手術は無事に成功しました。しかしその後、車椅子で生活しなければならなくなったのです。

バリアフリーではない家での介護にはとても苦戦しました。家族で交代しながら介護をして二年、何度も話し合って、特別養護老人ホームに入所することを決めました。これ以上自宅で看るのは危険だと思ったから決断したのですが、それでも母達はどこか悩んでいるように見えました。どんなにつらくても在宅介護を続けたのは、感謝や愛情はもちろん、家族としての責任感があったからだろうと思います。何度もホームに会いに行きながら、僕も罪悪感を感じていました。

そんなある日、曾祖母を担当していらっしゃる方が、こう声をかけてくれました。「おばあちゃんはとても幸せですね。ご家族がたくさん会いに来られて。おばあちゃんはこのようなご家族に囲まれて本当に幸せですし、ご家族にとても大切にされていたんだなって思います。」

その言葉は、ずっとモヤモヤしていた僕たち家族に光を投げかけました。その人にとっては何気ない言葉だったかもしれません。しかし、ささいでも優しい一言が、悩んでいる人の心を癒すことがあるんだと思いました。僕たちは曾祖母をとても大切に思っているし、これでいいんだと救われた気持ちでした。

今でも僕たちは、よく家族みんなで曾祖母に会いに行きます。「ばあちゃんの顔見に来たよ。」と言うと、曾祖母はニコニコしてくれます。まだ僕のことを覚えていてくれたんだと嬉しくなります。これからもまだまだ元気で、いつまでも笑顔を見せてほしいです。そして、僕たちに前を向かせてくれたあの一言を忘れず、次は僕が、人を癒す言葉をかけられる人間になりたいと思います。